

7月例会は「その木戸を通過」(市川崑監督作品)

夏の映画行事

例会のお知らせ



■名称/第49回例会『その木戸を通過』

■日時/7月15日(木) ①PM2:00~、②PM4:20~、
③PM6:40~

■場所/加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩10分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■受付/入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しく下さい。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

【例会作品データ】

■タイトル/その木戸を通過

■監督/市川崑

■出演/浅野ゆう子、中井貴一、フランキー堺、井川比佐志、岸田今日子、石坂浩二、神山繁、榎本孝明

■データ/1993年(2008年劇場公開)、日本、92分、ドラマ/時代劇、ヒューマン

■作品紹介/1959年に発表された山本周五郎の短編小説を、2008年2月に急逝した巨匠市川崑が、1993

年に日本初の長編ハイビジョンドラマとして制作した作品。2008年に劇場公開された。

浅野ゆう子、中井貴一、故フランキー堺ほか市川作品ゆかりの豪華キャストが出演している。城勤めの武士平松正四郎は、平松家を再興する当主に選ばれ、城代家老の娘との縁組も決まり、忙しい日々を送っていた。そんなある日、記憶喪失の娘ふさが突然平松家に迷い込んでくる。彼女の純粋な魂は、やがて正四郎の人柄と人生を徐々に変えてゆく。はじめは迷惑がった正四郎だが、次第にふさを愛するようになり結婚する。しかし、ふさは娘を産むと唯一の記憶の手がかりだった幻の木戸を通過して姿を消してしまう。

淡々とした夫婦の年代記の中に、日常生活のかけがえのなさ、人間同士の思いやりとやさしさ、人の真心が人の頑なさをおだやかに解してゆくさまを描いている。

夏の映画行事について

加古川シネマクラブでは、2005年の『父と暮せば』の上映会にはじまり、毎年、夏に一般の人を対象にした映画上映会を開催してきました。今年も運営委員会で、上映会の開催について話し合ってきたのですが、①一般の人が多数来場し感動いただける自信のある候補作品がない。②今まで補助を受けていた国の映画上映会に対する補助金の額が大きく減った。③赤字が出たときに、会の運営ができなくなる恐れがある。④来年の設立10周年に力を入れたい。という、主に4つの理由で、今年は映画上映会を行わないことになりました。

しかし、映画上映会はできなくても、何か映画関係の行事をしようということになり、映画関係者をお招きし、映画についてお話しいただく行事を計画しています。

まず、昨年、ワーナーマイカル加古川でも上映のあった『パチャママの贈り物』を制作した松下俊文監督の加古川への里帰りに合わせ、監督をお招きした交流会(夕食会)を計画しています。8月20日(金)の予定ですが、詳細が決まれば告知します。松下監督は映像プロデューサーとしてニューヨークを拠点に活躍し、監督として手掛けた『パチャママの贈り物』は、南米ボリビアのアンデス高地・ウユニ塩湖を舞台に描く、雄大な自然と先住民の家族の素朴で

やさしい生活の物語です。交流会には、多くの方に参加いただきたいので、是非、お誘い合わせの上、お申込みいただきますようお願いいたします。

次に、**9月2日(木)の第50回例会**のときに、50回の記念と、例会作品が『**牛の鈴音**』という農村のドキュメンタリー映画であることから、『**フランドン農学校の尾崎さん**』など記録映画を制作している**高橋一郎監督**に『**ドキュメンタリー映画の魅力**』についてお話いただく計画を進めています。また、50回の例会を振り替えるためにチラシの展示も考えています。

チラシ配布とクチコミによる会員勧誘を

1年ほど前から、会員の減少のため、この会の運営が厳しくなってきたことを繰り返し伝えてきました。運営委員会でも対策を話し合っていますが、基本的には、会員が「観て良かった」または「観たい」と感じる良い作品を続けることと、できることを会員の皆さんに呼び掛けて実践するということになります。この会のPRを会員の皆さんで行いましょう。今後も例会会場に持ち帰り用のチラシを準備しますので、映画に興味がありそうな知人を誘ったり、馴染みのお店や公共施設など、チラシを目につきやすい所に張るか置くようお願いしてください。

『RAILWAYS』と『告白』を観て

今年も、5月末から6月に数本の日本映画を観た。確か昨年のニュースにも、この時期は映画祭のように多くの作品が上映される楽しい時期であることを書いたはずだ。この2本の対照的な映画を続けて観た週は、実に刺激的で楽しかった。

『RAILWAYS』は、東京のエリートサラリーマンが49歳で会社を辞め、少年の日の夢であった郷里島根県の一畑電鉄の運転士となる物語で、ゆっくりとわかりやすく展開していく。刺激的な場面があるわけではなく、内容も甘く、映像も昔風で、粗探しをするつもりならそれなりに気にもなるだろう。しかし、ゆったりとしたテンポは心地が良い。登場人物を身近な人に置き換えたり、ゆっくりいろんなことを思いながら映画館で時間を過ごした。島根県の美しい風景や祭り、東京の電車研修施設など、実物を映像で観ることのできるのには映画の良さだ。この作品で島根3部作を完成させた**錦織良成監督**が、島根が大好きなことが良く伝わってきた。登場人物は、優しい心を持った良い人ばかりだった。

『告白』は、昨年度に本屋大賞をもらった小説で、**湊かなえ**という淡路島に住む作家の作品。主人公の教師が、担任している生徒の前で「自分の子どもがこのクラスの生徒に殺された」という告白から始まる。

強烈な作品を撮る**中島哲也監督**が映画にした。という予備知識しかないまま観た。

生徒も、先生も、母親も、自分のことしか考えず、自己弁護と自分にとって都合の良い言い訳をするために、嘘や黙認やイジメや殺人が、教室や家庭という閉鎖社会の中で広がっていく。死神が登場する『DEATH NOTE』のような展開の面白さだ。身の周りを振り返ると、この映画の登場人物の台詞と同じようなことを考えている身近な人や自分がいる。このことに気づくのもツライところだ。この映画に登場するのは、子供も大人もみんなが、悪い心を持った人ばかりだった。

後日、原作者の湊かなえさんが家庭科の先生として教壇に立っていたことを知ったときは、この物語にはノンフィクションの部分がいくらかあるのではないかと、少し背筋が寒くなった。(ハインリッヒ)

9月例会の会場予約から

例会会場の加古川総合文化センター大会議室は、映画鑑賞設備はそれほどではありませんが、交通の便が良く、使い勝手の良い大きな会場の割に使用料金が1日約2万円と安いのでありがたいところです。

9月の会場予約は、6月1日からできるのですが、希望の9月後半は空いていない。それどころか、9月3日から10月31日まで、市の公募展の絵の保管場所とするため、貸し出せないというのです。60日間もそんな理由で使えないなんて・・・という理由で、9月例会は、やむをえず月はじめの2日になってしまいました。

前回例会の報告

5月19日の例会では、『**扉をたたく人**』を鑑賞しました。大学教授と不法移民の若者との出会いと友情を、名優が演じるという映画鑑賞に最適の作品で、参加者の意見も好評でした。しかし、参加者数は過去最低の100人でした。

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200～300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 168人(5月19日現在)